

道路が破壊する下北沢の音楽シーン

平成19年1月8日

原告 鈴木 茂

1 はじめに

この訴訟の原告の一人、鈴木茂です。

1960年に東京の港区高輪で生まれ、現在は杉並区在住です。下北沢駅北側の大原1丁目に1986年9月から1993年11月まで7年以上のあいだ住んでいました。

1983年に大学を卒業後、(株)音楽之友社に入社し、音楽をテーマとする月刊雑誌や書籍、ムックの編集業務に20年以上携わりました。現在はフリーランスの編集者として活動しており、おもにロック、ジャズ、ブルース、フォーク、ワールド・ミュージックといった国内外のポピュラー・ミュージックを幅広く手がけています。

2 音楽が生まれる街、下北沢

私にとっての下北沢はまず音楽の街です。とくに70年代以降、数々のライブハウスが営業している下北沢には、自然にプロのミュージシャンや、プロになることを夢見るアマチュア・ミュージシャンたちが集まってきました。並行してコーヒーを飲みながらさまざまなレコードを楽しむことのできるジャズ喫茶やロック喫茶、そして、入手しづらい輸入盤や中古盤を扱うレコード店も増えていきます(写真資料1)。

そうしたお店が増えるにつれて、ミュージシャン以外にも、お気に入りのミュージシャン目当ての音楽ファンや、将来有望な新人を発掘すべく、レコード会社や音楽事務所のスタッフも大勢やってきては、日夜ライブを楽しみ、音楽談義に花を咲かせています。もちろん、その中には下北沢に住みついた人々も無数にいます。通りを歩いていると、ブルーハーツ、フィッシュマンズ、シーナ&ロケッ

ツ、カルメン・マキといった歴史に名を刻む著名なミュージシャンが買い物や散歩をしているところに出くわすことは珍しくありません。バーや居酒屋で隣の席にこんな人が！ といった興奮も私自身何度も味わっています。

そのような下北沢の街から生まれてきた音楽が、日本の音楽シーンを活性化させ、音楽ファンを育て、ひいては広く音楽関連産業を今日の隆盛に導いた大きな力となっていることは論を待ちません。

ロックをはじめとするポピュラー音楽をテーマとする音楽書籍や音楽雑誌の編集という私の仕事は、まさにこうして下北沢に育てられてきた／日々生まれている音楽とミュージシャンと音楽ファンが存在してくれているからこそ成り立つものであり、彼らの音楽生活をより豊かにすることを目的とするものです。

また下北沢には、私が日々の仕事のなかで親しくお付き合いさせていただいているミュージシャンや評論家、音楽ライター、翻訳家、編集者なども数多く生活しており、下北沢に頻繁に足を運んでは、ともに企画のアイデアを練り、打ち合わせをしながら、数多くの書籍やムックを世に送り出してきました。下北沢という街が発する独特のバイブレーションも、私の仕事にアイデアとエネルギーを与えてくれています。

つまり、下北沢は私が編集者という仕事を進めていくにあたって、絶対に欠かすことのできない大切な街なのです。

3 道路が破壊する下北沢の音楽シーン

東京は、ニューヨーク、ロンドン、パリなどと並んで、欧米にも負けない最先端の音楽が次々に生まれる、世界でも有数の音楽都市です。その東京にあって、下北沢は、ひとつの「街」という単位が創造の源泉になっているという点で稀有な場所となっています。地名自体が特定の音楽シーンと結びつけて語られるような街は、この広い東京にもさほど多くはありません。それは上述したような下北沢という街の歴史と特質が生み出した貴重な財産です（写真資料2）。

今回計画されている補助 54 号線が完成すると、これまでそうした音楽文化を

形成してきた多くのライブハウスやレコード店、喫茶店、バーなどが閉店を余儀なくされます。道路によって下北沢の街が南北に分断され、規制緩和に乗じて高層のテナント・ビルが立ち並ぶことになれば、街を訪れる人々も大きく様変わりします。

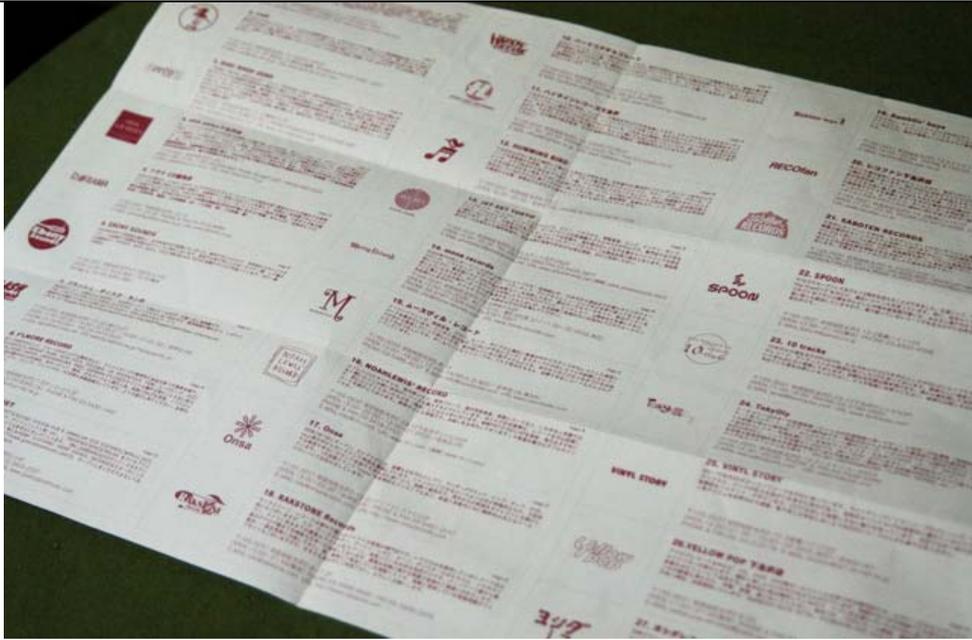
道路の建設は、世界に冠たる音楽大国日本の要としてすばらしい音楽を創りだしてきた街“シモキタ”を、死に体同然の街に変えてしまうでしょう。一部の人間や組織の利益のために日本のポピュラー音楽の歴史を変えてしまうことは許されないと私は考えます。

道路建設の結果として、下北沢が形成してきた音楽創造のサイクルが痛手を被れば、そのぶん生まれてくる音楽も衰退し、それはすなわち私の仕事のフィールドがひとつ失われることを意味します。また、私の仕事相手・仕事仲間が下北沢を離れてちりぢりになってしまえば、下北沢という独特の場が作り出す濃密な人間関係から、創意あふれる新たな仕事を生み出すことも困難になります。この道路の建設は、私の大事な仕事の源泉を奪い取ってしまうのです。

4 さいごに

下北沢は音楽の街というだけでなく、映画や演劇の街としても活況を呈していることから、国内のみならず海外からも大きな注目を集めています。これまで文化を欧米から輸入することの多かった日本は、今や音楽のほかにもアニメなどさまざまなジャンルでオリジナリティ溢れる豊かな成果を、逆に海外に輸出する国として成長しつつあります。下北沢の街をそうした貴重な文化の発信源としてさらに成長させていくことは、日本という国の目指すものであるはずだと考えますし、それは同時に私の願いでもあり、また理想でもあります。

この補助54号線の計画には、行政が住民の意志を無視して乱暴な手続きで進められていることなど、民主主義の根幹を揺るがしかねない数々の問題点が見取れます。民主主義の成熟なくして豊かな文化の創造と発展もありえません。裁判所の良識ある判断を求める次第です。以上



1. 下北沢のレコードショップマップ。
この小さな街に約30軒ものレコード屋があるのには驚く。



2. バーで演奏するミュージシャン。
下北沢では日常的にこういった場面に出会う。